

微笑日記

近藤啓太郎

講談社





微笑日記

著者 近藤啓太郎

昭和五十年三月二十日第一刷

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二—二二一 郵便番号 一一二

電話 (〇三) 九四五—一一一 (大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

© 近藤啓太郎 昭和五十年 Printed in Japan

乱丁本・落丁本はお取り替えます。

定価はカバーに表示してあります。(文2)

微笑日記

装
幀
析
久
美
子

この原稿を書きはじめて今日は、昭和四十九年三月十日であって、奇しくも寿美の一周忌にあたる。午前中、私はこの原稿を書き、午後からは心厳寺に行つて法事を営むのである。

いま、私の机の上に、四冊のノートが置いてある。一冊はいわゆる大学ノート、もう一冊は大学ノートと同じ大きさの黄色い表紙の薄いノート、他の二冊は小さくて薄いノートである。

いずれも病氣中の寿美の日記であつて、小さくて薄い二冊のノートには昭和四十六年十月五日から昭和四十七年三月十三日まで、黄色いノートには三月十四日から五月三十一日まで、大学ノートには六月一日から昭和四十八年三月三日までのことが書いてある。約一年半の闘病生活の記録と言つてよい。

私は寿美の闘病生活を材料にして、『微笑』という題名の小説を描き、『小説新潮』昭和四十八年八月号から、八回にわたつて連載した。『微笑』は病妻に対する私の一喜一憂のさまを描いた小説であるが、今回は日記を引用して、寿美自身の闘病心理を描くものである。『微笑』と表裏一体の関係にあるので、『微笑日記』と題した。

さっそく、寿美の日記の第一日目の記事を引用する。

十月五日（火）

ついに、学校ダウン。胃部が圧迫されるので、苦しくてやりきれない。夕方、啓坊、市村先生を呼んでくれる。すぐ入院との事。郁太郎先生、救急車で来て下さる。

寿美の苦痛の激しさが、たったこれだけの短い日記で、私にはよく分る。「啓坊」とは、私のことである。

ふだんは、「啓坊さん」と呼んでいた。結婚したとき、寿美はまともな呼び方が照れ臭く、当時まだ健在だった私の母親が子供の頃からの癖で、「啓坊さん」と呼んでいたのを見習ったまま、二十年後の今日まで及んでいるのであった。私は五十一歳、寿美は四十二歳である。

「啓坊」とは、長男の啓一郎の呼名であった。「啓坊さん」の「さん」を書くのも億劫なくらい、寿美は苦しかったに違いない。寿美はまめな性質で、何事につけてもめったに手を省く女ではなかった。

寿美は夏休みを利用して、約三週間の海外旅行に行き、八月二十六日に南房州鴨川のが家に帰って来たのであるが、旅行疲れのせいも、妙に食欲が無いと言っていた。日がたつにつれて胃が異常に張ってきたので、胃腸病院に行った。薬を飲んでも一向に快方に向わず、胃はさらに膨脹してきたので、十月四日にはレントゲン検査をしたが、胃潰瘍その他厄介な症状はないという。が、翌五日、寿

美は四十度近い高熱を發して、一度も休んだことのない学校を休んでしまったのである。

寿美は身長一六〇センチ、体重六〇キロ、「快眠、快食、快便」と三拍子そろった健康そのものの女で、結婚してから二十年間、病気で寝こんだことが一度もない。流感で四十度近い高熱を發しても、無理に学校へ行つてしまい、二、三日でけろりと直った。寿美が厄介な病気になるなど、私は想像したことさえなかった。

寿美自身が胃が悪いと言い、胃腸病院でも胃カタルと診断していたので、私はほとんど気にしていなかった。が、寿美が学校を休んだことで、私は首をかしげた。ひょっとすると胃カタルではなく、何か厄介な病気かも知れぬと疑い、私は小田病院に電話をかけて、市村先生の往診を頼んだのである。

現在のわが家は安房鴨川駅から二キロはなれた農村地帯にあるが、七年前までは駅に近い小田病院の向う前の借家に住んでいた。十年近く住んでいたので、小田院長とも市村先生とも親しい間柄であった。

市村先生は独身の頃、毎日のようにわが家に遊びに来ていたので、特に親しい。市村先生は四十歳になるが、自分で車を運転して気軽に往診してくれるし、診察の正確なこと鴨川一という定評があった。

市村先生は寿美を診察するなり、日頃に似ず、しどろもどろの調子で口走った。

「これは、胃じゃありません。ええと、肝臓と胆嚢が悪い」

と同時に、市村先生はリビングルームに行き、亀田病院に入院の電話をかけた。小田病院は内科で

あるが、亀田病院は総合である。手術を要する病氣と思い、くわしく病状を聞きたかったが、何故か市村先生は私を避けるような態度で、多忙を理由にそくさと帰って行った。

間もなく、亀田病院の郁太郎先生が看護婦と一緒に救急車で迎えに来了。郁太郎先生は私より四つ年下で、暮仲間の上、お互に大好きでもあるので、これまた親しかった。亀田病院は長男の俊孝先生が院長、次男の郁太郎先生が外科、三男の博行先生が内科を担当し、他にも数人の医師がいて、私立では千葉県一の規模を持っていた。

寿美が入院した後、私は亀田病院に行つて、郁太郎先生に会った。郁太郎先生は私の顔から視線をそらして、言いくそくに言った。

「僕の勘だけど、どうも癌らしいんだ。寿美さんの顔が、どうもそういう顔なんだよ。七分通り、そんな勘がするんだ。長年の経験でね」

私は呆っ氣にとられて、変に少し笑いながら、郁太郎先生の顔を見直した。陽気で健康そのものの寿美と癌とが、どうしても結びつかない。郁太郎先生は他の病名を言うつもりで、間違つて癌と言つてしまったのではないのか。が、郁太郎先生はつづけてこう言った。

「僕の勘だから、はっきり癌ときまつたわけじゃない。とにかく、大至急検査をするよ。問題はすべてそれからさ」

検査の結果、癌の疑いが晴れるのではないか。かつて、母親が小田院長から食道癌と疑われ、千葉の大病院へ行つたが、検査の結果、癌ではなかった。そういうことも思い出して、私は強いて樂觀的に考えていた。

十月六日

婦人科検診。苦しい腹を押し、粘膜をはがしている。ソウハの時のようだ。はてなと思う。

午後、郁太郎先生来て、子宮筋腫との事。間もなく、啓坊さん来る。表情がおかしい。ハハアと思う。夕方^{あや}も夜も、郁太郎先生来て下さる。

夜七時すぎ、文^{あや}と啓坊来る。文はシンの強い子だ。啓坊はその点、気が弱い。すぐ二人を帰らせる。

小便の出る注射とかん腸で、大分腹が楽、久方振り。

この日、小田院長から東京の大病院か国立病院で検査した方がよいという助言があった。寿美の腹部の膨脹は腹水がたまっているせいであって、典型的な卵巣癌の症状だと小田院長は言った。しかし、検査は絶対に必要である。検査をいそぐためには、東京の方がよいという意見であった。

市村先生が日頃に似ず^{おどろ}狼狽したわけが、私に分った。郁太郎先生も私に急激なショックをあたえぬため、僕の勘だとか七分通りだとか、言葉を濁していたのである。

癌は発見されてから、半年乃至一年で死ぬ例が多い、と私は聞いていた。私は癌の特効薬の出現を願うしかなかった。ところが、小田院長は寿美のような症状の場合、おそらくひと月で駄目になると言った。私は顔色が変わるのが、自分で分った。ひと月では癌の特効薬出現の儚い^{はかな}期待すら、あきらめなければならぬ。

私は亀田病院に行き、郁太郎先生の意見を聞いた。郁太郎先生は二、三箇月ではないかと言った。ひと月も、二、三箇月も、大して変りはない。

私は平静な表情態度で寿美の病室へ行ったつもりであるが、やはり内心のショックをかくせなかったものと見える。

婦人科の検診のとき、寿美は「はてなと思う」のであるが、子宮癌ではないかと疑ったのである。郁太郎先生から子宮筋腫と聞き、いったん疑いは晴れたが、私の表情がおかしいので、再び「ハアと思う」のである。

癌と疑っているに違いないのだが、寿美の日記に癌という文字はない。癌と書くと、そこに逃れられない烙印（ろういん）を見るようで、恐しくて書けなかったのである。疑惑はあくまでも疑惑であり、断定ではない。そこに、救いがある。

翌日の入院準備のため、私はその日のうちに上京した。上京の車中、私の悲しみと悔恨は深かった。

私は「飲む、打つ、買う」の三拍子そろった男で、特に女癖が悪い。東京の商売女からもらった淋病を、寿美にうつしたこともある。しかも、そういうことを小説に描いてしまうのだから、恥を天下にさらしているようなもので、寿美の苦労は容易でなかった。

私は一人っ子で育ったせいとか、大変な無精者であり、わがまま者であった。寝そべっていて、煙草を吸いたくなると、寿美を呼ぶ。ちょっと起きれば、傍の机の上に煙草はあるのだが、それが面倒臭くて、寿美に持って来させるのである。

徹夜で碁を打っていて、空腹を感じると、夜中の二時、三時でも、私は寿美を起して食事の用意をさせた。寿美は学校に勤めているので、夜中に起されるのはやり切れないのだが、決して厭な顔をしない。寿美の笑顔に碁の相手はいっそう居たたまれぬ気持を感じ、それ以来、長らく遊びに来なくなった。

寿美はかつての「ミス千葉」であった。当時のミス・コンクールは、新聞社と保健所の共催で、「将来の健全母性のため」という主旨であったから、容姿よりも健康が重視された。師範学校を卒業して間もない寿美は、地元の保健所の職員にかり出されて参加出場し、「ミス千葉」に選ばれたのであるが、確かに健全母性の名に適^あわしかった。

子供を二人生んだが、いずれも嘘のように軽い安産であった。長女の文を生んだとき、数時間たつて私が亀田病院に見舞いに行くと、寿美は起きて茶を入れた。お産がこんなに楽なものなら、十人生んでも二十人生んでも平気だと言っていた。

子供の教育のモットーは「正直と努力」であり、私が中学生になった啓一郎に酒を飲ませて酔っぱらわせると、寿美は本気になって怒った。といって、寿美は決して堅苦しい女ではない。女にしては、珍しく寛容性に富んでいた。

私に対する復讐にしても、ユーモアがあった。あるとき、私は亀田病院で血液検査をした。検査の結果が分らぬうちに上京すると、寿美から旅館に電話がかかってきた。

「郁太郎先生から報告があったけど、ちょっと変だって話よ」

私は梅毒に対して異常な恐怖心を持っているので、途端に憂鬱になった。

「疑わしい点があるんだそうだけど、こんなときはとりあえずチンク・サーレっていう薬を飲んでおくといいて」

「チンク・サーレか？」

「そう。薬局で売っているそうですよ」

私は旅館の人にたのんで薬局へ買いに行ってもらったが、どこにも売ってなかった。私は寿美に電話をかけ、チンク・サーレの製薬会社の名を訊いた。途端に、寿美が声を上げて笑い出した。

「馬鹿ね。啓坊さんは、本気にしていたの。チンク・サーレなんて薬、あるわけがないじゃないの。チン・クサーレよ。小説家の癖に、そんなことが分らなかったの」

「馬鹿野郎……！」

と呶鳴りながら、私も自分の間抜けさ加減に思わず吹き出した。

寿美はするようにユーモアもあり、寛容性にも富んでいると同時に、忍耐力も強かった。

寿美は隣の天津小湊町の清澄山麓の農家の生れで、八人同胞の七番目であった。貧しい暮しの中に育ったので、生活の厳しさは身にしみている。私は芥川賞受賞の二、三年後、中学教師をやめたが、寿美はいまだに教師をつづけていた。小説家はいつ原稿の注文が来なくなるか分らぬという不安からである。そして、それが生活の糧になる以上、私が恥さらしの小説を発表しても、がまんすべきだという考えが強かった。

女道楽を責め立てると、わがままな私の癪癢が爆発して、離婚沙汰に発展する危険性もある。子供の不幸を思うと、寿美は何よりも離婚が恐しく、強いて寛容に振舞わざるを得ないようでもある。

た。

私は寿美の内心を見抜き、弱味につけこんで、横暴にわがままに振舞っていた。そういう横暴な良人だった自分だけに、突然、寿美の死を目前にして、私は痛烈な悔恨の情に苛まれた。何とかしてもう一度、寿美を元氣な軀に戻し、世間並みな幸福を味わわしてやりたい。そういう思いが、切実であった。

寿美は素朴で健康な性格の女であるだけに、生命に執着が強く、長生きを願っていた。やがて子供たちが結婚して孫が出来る。そういう幸福を何よりの幸福と思っている女であるだけに、私は寿美が殊更哀れでならなかった。

十月七日

救急車で東二に入院。車がゆれて、すごい。

朝六時なのに、郁太郎先生夫人、先生と来て下され、階下まで荷物を運んで下さる。恐縮以外何ものもなし。おかしいなと、よけい気をまわす。

とにかく、なるようにしかないのだから。

九時四十分、東二の玄関着。のなみのおかみさん、来てくれる。うれしい。

木村先生の診察、午前一回。午後、産婦人科の先生をつれてきて下さる。

夕方、姫ママとお母さん、べん当を持ってきてくれる。

着いて間もなく、八代先生よりTELあり。何でも申しつけてほしい事を言えとの事。有難い

事だ。

昼、おかげ三分の一と塩づけ少々。夜はおかげ四分の一と姫のママにいただいた高野ドウフ、牛肉、ハス、ナラヅケ、玉子焼き、少々。

おなかがはる。婦人科の検査で、又おされると思うと、ゲンナリ。

夜、少々出血あり。昨日のガリガリやられたせいかな。毎月の生理のハジマリかな。

とにかく、疲れているが、感じがしない。目が疲れて本を読むと、すぐくたびれる。まったく、この腹の中をさっと開いて、悪い所でもみつけれないのかナ。

亀田病院の看護婦は、とにかく言葉づかい、態度、申し分ない。

国立病院の看護婦さんもやさしい。

三階からの夜景、ネオンは大分減ってきた。

なんにも用のないのも退屈だ。洗たくしたい。しかし、体力を貯えておこう。

東二とは、国立東京第二病院のことである。東二の第二外科医長の木村博士は、私の小学校時代の同級生である。

朝六時に亀田病院を出発するとき、郁太郎先生の奥さんが見送りに来たことで、寿美はいっそう気をまわしている。郁太郎先生の奥さんは元来、やさしく親切な人なので、早朝の見送りもさほどに不自然ではないのだが、寿美は素直な感情で受けとれなかった。東二に入院ということ、いよいよ容易ならざる事態を感じたに違いない。

東二の玄関に着いたとき、寿美は救急車の中で泣いていた。のなみのおかみさんが来てくれて嬉し
いと書いてあるが、単なる嬉し泣きではない。

私は上京する度に赤坂の「野波旅館」に泊っていて、女将の波ちゃんとは三十年來のつき合いであ
る。波ちゃんの一人息子の満はこの十一月に結婚するのだが、その仲人を私たち夫婦は頼まれてい
た。

寿美は救急車にゆられながら、孤独感に苛まれたに違いない。出迎えは私だけと思っていたのに、
波ちゃんも出迎えてくれたので、いくらか心強さを感じた。つい嬉し涙が流れたのだが、それだけ却
って、寿美の心細さが私には如実に感じられた。藁をも掴む思いとは、このことであろう。

木村は診察後、私に次のような意見を述べた。

卵巣癌と思われるが、検査をしなければ断定は出来ない。手術の件は、婦人科医長の意見に従うの
がよい。

姫のママ、山口洋子の家は、「東二」から歩いて、一、三分のところにある。ママとは十数年のつ
き合いで、単にバーのママと常連客という関係ではない。ママは十年前、小説を描いて、私の指導
を仰いだことがある。ママは小説家の才能も豊かだったが、時間に余裕がないので、その後、作詞家
に転向した。いまだにママは私を、「お師匠さん」と呼んでいる。その上、ママのお母さんが犬好き
で、私の家で生れた柴犬と紀州犬を飼っていた。

八代先生は、寿美が勤めている東条小学校の同僚である。寿美は腹水が溜まって苦しいにかかわら
ず、寝てばかりいると退屈して洗濯がしたいと思うのだから、よほど芯の丈夫な軀の持主なのであっ

た。

十月八日 入院二日目

朝は血液けんさと、血を一〇cc位、血液検査室でとる。

十時半、婦人科の診察。横柄きわまりないような態度の医長で、何で来た、鴨川から来たのか、なぜ外科なのに婦人科に来たか、とか、しつこい。

まわりにいた人が、おもしろい先生ですよ、という。

「オシッコシテ、待ッテ」待っていると、若い婦人が、筋腫ですか、私も手術したけど、かんたんです、との事。ヘーエとびっくり。

いよいよ診察、なるほど大きいだけあって、診察室がいくつあるか、わからない程。

あまり痛くやらず、こわくなかった。

小便が出ないと思ったら、カテーテルで導いて出すのをやった。痛い痛い。あとで小便するとき、激痛が走る。タマゲタナアー、モー。

啓坊さん、来るって云ったけど、こない。きっと借金出来なかったんでは。借金だらけで大変だ。私の株を売ればいい。

表庭で、秋田犬が走っている。まだ三時半なのに、夕方のかんじ。朝から快晴。青空が見えた。

五時前、野波のおかみさん、啓坊さん、中央公論の伊吹さん、問題小説の菅原さん、来て下さ